

長嶺ヤス子と442年ぶり天体現象

冬なのにコスモスが咲いている。

去る11月7日、新宿文化センターで、フラメンコ舞踏劇「長嶺ヤス子の安達原」が開催された。

世界の5指に入るダンサーと評されるYASKOの公演は、2019年12月「雪女」以来じつに3年ぶり。1500人収容の大ホールは興奮の熱気で満ちたのだった。

長嶺ヤス子は福島県会津若松市出身。会津藩の末裔である。1936年、昭和は11年2月の生れ。まもなく87歳になる。

いつものことながらきもの姿、裸足で邦楽の演奏でフラメンコを踊る革命性を痛感する。これは舞踏芸術の革命だ。参考にと2020年夏に「第47回現代舞踏展」を覗いたけど、日本古典文学に材をとり、邦楽で踊るなんて例は皆無だった。彼女は天才舞踏家であり前衛芸術家である。



撮影©今井一詞

長嶺ヤス子の古典文学の素養は祖母のおかげという。夜寝ると祖母がお話をしてくれた。地獄極楽の話。安珍清姫の話。狐の話。安達ヶ原の鬼婆の話。

彼女には鬼婆の話が一番強烈だった。そして子ども心に「鬼はこわいけれども、悲しくかわいそうだ」と思った（本人メモ）。

最初に「安達ヶ原」を踊ったのは47歳。51歳には黒人ミュージシャンによるわらべ唄編成の「鬼婆」。7名の黒人ダンサーとロック調で「鬼婆」をやったのが56歳。71歳の時も「安達ヶ原」を踊った。

今回の公演は40年がかりとなる。従来「鬼婆は旅の僧に裏切られ、再び闇の世界に戻る」を破棄。若い僧の懸命な読経と、己が命の限界をかえりみぬほどの献身で鬼婆を浄化、二人は浄土へ旅立つ物語にした。

相方はいつものごとくジャコブ・グレロ。舞踏劇の主力として全体を牽引し、YASKOを庇い、挑発し、激励する。衣装のせいもあるだろうが、パンツ姿は9頭身に観え、指先ひとつにも表情がある。

靴のつま先と踵の鉄片が鳴板に刻むリズムは、ぜんまい仕掛の機械だ。観客のあらかたは総毛立っただろう。たぶん母の胎内にいたときから、フラメンコのリズムで生育したのだろう。二人の年齢差は40。

フィナーレ。背景に満月が大きくある。舞台には八の字に真言宗豊山派僧侶13人が並び、雷のように読経を轟かせる。その中央を、二人は手に手をとって昇天していく。

当夜ぼくたち夫婦のシートは、1階13列の30番。これがなんと舞台中央線上の席だった。ぼくは息を止め満月へ向う二人のうしろ姿を凝視し続けた。

それから24時間後、日本列島は皆既月食となった。天王星も月に隠れた。太陽と地球と月と天王星が一直線上に並ぶ珍現象は、1580年以来で442年ぶり新聞にあった。

首都圏は8日～11日と肉眼観測で満月。午前4時の月面に、YASKOと若き僧の宇宙浄土行の姿が、はっきりと在ったのだった。